

学習塾のCG高等館東進衛星予備校は今夏、高校生をシンガポールと、秋田市の国際教養大学に「留学」させる国際理解教育の取り組みを展開した。国際的に活躍できる人材育成を目指すもので、計16人が参加した。(石本 健二)

# 世界で活躍目指して

## 夏休み高校生が国際体験

シンガポール訪問は「キルパス・ビジット・イン・シンガポール」と名付けられ、同予備校と神奈川新聞社の共催、県教育委員会の後援。7月24日から8月1日の日程で、女子4人と男子2人が訪れた。

「2050年には世界のGDPの50%をアジアが占めると予測され、シンガポールは経済・流通のハブ(アジアと世界の中継点)として発展が著しい多民族国家(同予備校)であることから同国を選んだ。

初日に現地の学習塾講師のインド人女性が英語でシンガポールの文化を説明。午後はシンガポール国立大で、日本語を学ぶ同大の学生が日本語でシンガポールの文化や経済などを紹介し、日本の高校生が逆に英語で日本を紹介する2言語交流を行った。

現地ではまず、「経済研究」として日本貿易振興機構(ジェトロ)シンガポール事務所で開催されている「異文化研究」として、英語でシンガポ

ールの文化と宗教について学んだあと、実際にヒンズー教の寺院やイスラム教のモスクなどを訪問し、異文化理解のきっかけづくりを行った。

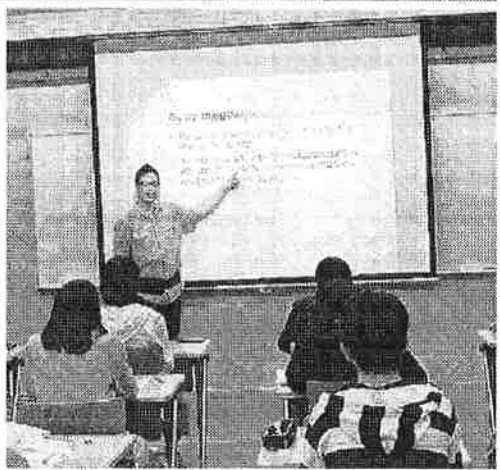
また、「シンガポール国立大学での2言語交流」として、日本語を学ぶ同大の学生が日本語でシンガポールの文化や経済などを紹介し、日本の高校生が逆に英語で日本を紹介する交流を行った。行ったり、「企業研究」としてスイスに本拠を置く金

融会社UBSの日本人従業員と外国人スタッフから「新入社員向けプログラム」の一部について英語でレクチャーを受けた。さまざまな体験を重ねた生徒たちは7日目に「シンガポールと日本の違いについて」と題して、一人一人英語でプレゼンテーションを行った。

を英語で行うのが特色。8月17〜19日に男子3人、女子7人が訪れた。

同大の英語教師ブライアン・ハーンさんが、英語で行うプレゼンテーションのポイントを解説。効果的なパワーポイントの使い方、ボディーランジェージの大切さ、英語の上手さよりも伝えようとする中身や意欲が大切であることを教えた。

生徒らは3日目に「歴史上の人物」をテーマに英語のプレゼンテーションに挑戦。杉原千畝、手塚治虫、マーチン・ルーサー・キング牧師などについて、深夜までかかってまとめた内容を一人一人発表した。「最初は自分の英語が正しいか心配で話せなかったが、伝えようとする気持ちが大切だと知って前向きになれた」と話す生徒もいた。



イスラム教のモスクで信者の男性(右)から説明を聞く高校生ら(国際教養大学(秋田市)で英語教師のブライアン・ハーンさんから英語のスピーチのポイントを学ぶ高校生ら)